

秋元樹先生のご退職と創刊50号によせて

社会福祉学科 学科長 北 西 憲 二

秋元先生が20年にわたる日本女子大学社会福祉学科での教員生活を終えられ、退職となった。労働者福祉、そして国際労働福祉という日本ではあまり注目されなかった領域について、長年取り組んできたパイオニアである。今では日本でも労働者福祉について現代的問題として注目されており、秋元先生の先見の明を物語っている。

私も最近労働者のメンタルヘルスに興味を持ち、またそこで悩んでいる人たちへの精神療法を行ったり、産業カウンセラーたちへの講演やスーパービジョンを行っている。もっと秋元先生のお話を聞いたら、そしてその問題意識を学べたらよかったと後悔している。

秋元先生に最初にお会いした時の印象が強く、今でも鮮明に覚えている。精神科医として病院、医療という世界が肌にしみこんでいた私は、文系である女子大学、そして社会福祉学科に教員として赴任し、いわばこの異文化に戸惑っていた。その私に最初に社会福祉の領域について、オリエンテーションをしてくれた。その話は私にとって全く初めての話でとても新鮮な感じで聞いた。今ではそれらについて少しは理解できるが、その当時は戸惑いながら聞いていたという記憶がある。しかし秋元先生は話し出すと止まらない習性があり、熱心に話を続けてくれた。それは日本の社会福祉と海外のソーシャルワークの違いであったと思う。国際的に活躍する秋元先生らしい観点からの解説だったと思う。

秋元先生は私にとって最初に会った時から国際人であった。その時、やせて色黒でひげをはやした先生にお会いし、エチオピアのマラソンランナー、アベベ（東京オリンピックの金メダリスト）を連想した。哲人の風格があった。その後エチオピアの大学で社会福祉の講義をボランティアで行った話を聞いて、まさに適任だ、秋元先生ほどエチオピアに溶け込める人はいないだろうと、思った。そしてそのフットワークの良さに改めて感心した。

秋元先生はまた冷静沈着な人である。社会福祉学科の学科長時代について私は残念ながら知らないが、人間社会学部研究科委員長時代の見事な采配ぶりは私の心に深く焼き付いている。

さて秋元先生が20年の在職期間を経て、退職する今年度は、また社会福祉学会誌の50周年に当たる年でもある。創刊号に書かれている生江孝之先生の「社会事業講座担当二五年間の思い出」が興味深い。生江先生は1918年（大正7年）に日本女子大学で講義を担当し、1921年（大正10年）には「社会事業学部」が新設された。そこでの主たる問題領域は、「児童保全」と「女性保全」であり、それはまさに今日の話題であった。そこからの積み重ねが本学社会福祉学科の最大の財産であろう。

ここから新たな50年を目指して、日本女子大学社会福祉学科のさらなる発展を心から祈念する。